

よく、「妄想」の「妄」を使った「妄念」と勘違いする人もいますが、「忘れない」の「忘（ぼう）」を使った「不忘念」のお話です。

「不忘念」とは、「仏教の正しい教えを忘れることなく、心にとどめ続けること」です。

曹洞宗の名前の元とも言われる中国の洞山良价さまは『洞山録』の中で、「相續也大難（そうぞくやだいなん）」と言って、「初志を持続することは非常に困難である。」と説いています。

たとえ、仏教を学び出家をしても、この「不忘念」の心が失われてしまうと、煩惱などにより途中で挫折してしまう、ということです。

しかし、この「不忘念」の心があれば、もろもろの欲望に負けず、仏道を歩もうという最初の志によって、欲望に取り込まれずにいられるのです。

お釈迦さま最期の誡めの教えにある、「もし、志の力が確かで強ければ、欲望の賊の中に入ったとしても、その欲望の被害には逢うことはない。例えば、鎧を着て戦場に入れば怖くないようなものなのだ。」とということです。

ある老師が、「仏教はいいものだと憧れれば、道は完成されている」とよく仰っていますが、憧れに近付こうという志を常に忘れない「不忘念」のことを指しているのでしょうか。

まさに、世阿弥の『風姿花伝』や『花鏡』で説いている、その時々に応じてその試練に対処して自分を高めていく「初心忘るべからず」の姿勢こそが、目的を達する「不忘念」と相通じるのではないのでしょうか。

僧侶の場合、その心の在りようにより、戒めや修行の生活を習慣化していくのです。その志を持ち続ける「不忘念」とは、つまり、目的を果たそうとする力であり、果たしている力であり、果たし続ける力なのです。

「不忘念」こそ、善い結果をもたらし得る心の在りようなのです。

私たちの日々の生活における心の在りようも、「不忘念」つまり「初心忘るべからず」でありたいものです。